



ウサギ狩り作戦～三工篇

ミュ

日課の廃棄弁当回収の帰り道、
後ろから急に声とともに肩を叩かれ、
あわてて振り返る。

わあ！せ、せせ、先生でしたか……
普段人から声をかけられることがないので
びっくりしてしまいました……

びびり

ああ、それは「めんね」
公園に帰るところかな？

ちゃんと毎日食事はできているかい？

あ、はい……。なんとか……

先生の視線が私の握っている袋に落ちる。

それだけで足りるの？

その、今日はたまたま、
廃棄が少なかったみたいで……

その……

ふーん、そういえば今日、
シャーレに手伝いに
来てくれる子が急に休むとかで、

その子のために買っておいた弁当が
余っちゃってるんだけど、

捨てるのももったいないから持っていく？



量が足りない
とまたサキちゃんに
怒られるし……

買ってもらうわけじゃなくて、
あくまで捨てるものを
もらうだけなら、大丈夫、だよね……？

いいいんですか……？それなら、
よろしくおねがいします……！

もちろん。じゃあ、いっつか

私は先生の後について、
シャーレに向かった。

初夏とはいえ、昨夜の雨のせいか今日は特に蒸し暑く、シャワーにつく頃には私も先生も汗だくになっていた。

先生の部屋はクーラーがきいており、吹き出た汗に冷風が当たって気持ちいい。

椅子に腰掛けてタオルで汗を拭いていると、先生が廃棄弁当といっしょに氷の浮かんだジュースをもってきてくれた。

汗かいて喉も乾いたでしょ？
よかったら飲んでね

せっかく出してくれたんだし、ジュースくらいなら……
もらっても大丈夫だよね。
喉もかわいてるし……



私は一瞬躊躇したが、
おすおすとコップに手を伸ばした。

先生がなぜかじっとコップを
見つめ続けていることに、
若干の違和感を覚えつつも、
私はコップをもちあげてジュースを口に含む。

……？あれ？冷たくておいしいけど……
こんな味だったかな？

いつも飲んでいたジュースと
少し味が違うような気はしたが、
このところずっと公園での
路上生活を続けていたせいで、
甘いジュースなんて本当に久しぶりだ。

一度口をつけてしまうと、
もう抑えることはできず、
ごくごくと喉を鳴らして、私はジュースを
すべて飲み干してしまった。



ふう……「うちそう」までした。
美味しかったです……

久しぶりのジュースだもんね。
そりゃおいしいよね。
これはミュと僕だけの
秘密ってことにしとくね

あ、はい……

一瞬飲むのをためらったのに、
結局、誘惑に負けてしまったのを
先生に見抜かれてしまったみたいで
恥ずかしい……



ええと、ミト。
女の子に「うう」とき
いうのはちょっとためらわれるんだけど……

そのよかつたら、
ここでシャワーでも
浴びて帰ったほうが
いいんじゃないか？……
ほら、汗もかいちゃってるから……

え、ええっ!?!?
わ、わ、私、そんなに……
匂いますか？

雨に濡れた後の
生乾きの犬の
匂いって感じかな……



そ、そこまで………!?
わ、私が動物に
寄ってこられるのも、
きつと私から動物の匂いが
するせいで仲間だと
思われてたんだ……

人に相手にされないなら、
もういっそのまま
臭くなり続けて山に
こもって動物に囲まれて
生活したほうが……

私が半べそをかいて
絶望していると、先生があわてて、

いや、そこまでひどくはないよ、
うん。ただ、ほら、
あまり不潔にしていると
ミュウの健康も心配だしね。

他の子に遠慮してるのかも
しれないけど、
ミュウが暑い中シャーレまで
足を伸ばしてみんなの食事を
手に入れて、
それで汗をかいちやっただから、
シャワーを浴びるのは
がんばったミュウへのご褒美だと思えばいいんじゃないか？

すごい早口で、まくしたてるようにシャワーを勧めてきた。

私は、その庄に
若干押されるように、

それなら……
お言葉に甘えて、
シャワーお借りしますね……

と口にしたのだった。



シャーツ……
蛇口をひねると、
すぐに暖かなお湯が
体に降り注ぐ。

気持ちいい……

柔らかな温水が、
べとついた汗を
洗い流していく
心地よさに思わず
ほう……っと
ため息をついてしまう。

湯船こそないが、
シャワーレの
シャワー室は
それなりに広く、
シャンプーや
ボディソープなども
備え付けられている。
何よりお湯が
使い放題だ。

公園のドラム缶風呂を
4人で使う状況では、
体を洗うのに
使えるお湯の量だって最低限だ。

私だけ……いいのかな……



RABBIT小隊のみんなが我慢してるのに、自分だけが気持ちよくシャワーを浴びて汗を流していることに罪悪感が湧き上がる……が、すぐに頭をぶるぶると振ってその考えをかき消した。

ミヤコちゃんは……頭なすぎる……よね

ミヤコちゃんの、どこの組織からも自立したいって気持ちはわかるけど、少なくとも先生は今のところ私たちの味方をしていてくれるんだし、少しくらいは大人を頼ってもいいんじゃないかと思う。

はあ……それにしても……気持ちいい……



久しぶりのシャワーのせいかなんだか肌も敏感になってきている気がする。今まで我慢した分たっぷりシャンプーを使って髪を洗う。

んっ……んふっ……

思わず声が漏れるほど気持ちがいい。いつもは石鹸で洗うせいで髪を洗った後は髪が脂分を失ってパサパサになるのだが、シャンプーで洗った髪はなめらかで手触りもしっとりとしていて自分の髪なのに思わずうっとりしてしまう。ボディソープを手に取り、泡立ててからそっと体をこする。手、顔、首ときて、体を洗いはじめたときだった。

んっっっはうっ……

胸を洗おうとして
指が乳首に触れた瞬間、
体に電流が走るように、
びりびりとした
快感が突き抜けた。

あれ……おかしいな……
いつもはこんな
感じしないのに……

見ると、すでに乳首は
何かに期待するように
膨らんで、少し指がふれただけでも
感じたことのないような快感を生み出す。

だ、だめ……
はやく洗って、
出ないと……

一度その感覚に
気づいてしまうと、
嫌でも意識してしまう。
できるだけ敏感なところは
避けるように洗うのだが、
手が触れたところから
ムズムズするような
気持ちよさが湧いてきて
無意識に声が漏れてくる。



んっ……んっ……

必死に声を抑えながら、
なんとか背中やお腹、
足までは洗ったが、

股間を洗うのは自分がどうにか
なってしまうそうのためらってしまう。

でも……「ん」も、
洗わないと……

ソープを泡立て、
おそるおそる股間に指を伸ばす。

そつと……
そつと洗えば……
んひっ!! ああんっ!!

軽く秘裂をなぞっただけで、
感電したかのように体が
びくんっとならした。

んっ、うっ……
だ、だめっ……
が、我慢。我慢しないと……

ただいつもどおりに股間を洗っているだけなのに、
体はびくびくと痙攣をくりかえし、
どんどん息があがっていく。
おしりの穴は優しくこするだけでひくひくと蠢き、
むずむずするような快感を伝えてくる。

あそこからは、明らかに水ではないぬるりとした液体が
湧き出している。ケリは、まだ手もふれていないのに、
SRTの自分の部屋のベッドでひとりエッチを
していたときのようにばんばんに膨れてスキンスキンと
甘い疼きを訴えてくる。

あっあっ……
洗ってる……んっ……
だけなのに……
んっ!! なんて
こんなにつ……

ぐわんっ……
ぐわんっ……

普段は股間を洗うだけで
こんなに気持ちよくなったりはしない。
頭の片隅で何かがおかしいと思いつつも、
指は自然と何度も何度もスジを往復する。

ああっ……
指が勝手に……
んあっ……

そういえば、
公園生活始めてから、
一人で自由になれる時間なんて
なかったかも……だから……
体が、んっ……
求めちゃってるのかな……

そう思ってしまうと、
もう我慢なんてできなかった。

このまま帰っても……
ミヤコちゃんたちに
変に思われちゃうし……
1回だけ……1回だけなら……

誰が聞いているわけでもないのに、
言い訳を口にしながら、
泡だらけの手でクニクニと陰核をこね回す。
反対の手は胸に。同じように硬くしこった乳首を
押しつぶすように手のひらで撫で回す。

んんっ……
あっあっあっあっ……
気持ちいい……

もともと、オナニーは嫌いではない。
人に見てもらえない寂しさも、
妄想しながら自分を慰めている間だけは忘れられた。

慣れた手付きでくちゅくちゅと愛液を
かき混ぜながら、秘壺の入り口を指で
マッサージする。



シャワー室の正面に貼られた鏡には、
とろんとした目で口の端から
よだれをこぼしながら、
せわしなく股間の指を前後させる私の
姿が写り込んでいる。

その姿がますます性感を刺激し、
あっという間に昂ぶっていく。



はっ……ふっ……
んあっ……ああっ……
も、もう……イクっ……
イケそう……んうっ

気持ち良すぎてチカチカする視界の中、
ふと、出しっぱなしだったシャワーが
目にとまる。

たしか、シャワーを
当てながらするのも、
前にネットでみた記事に
載ってた気がする……

シャワーヘッドを手に取り、
指で穴を刺激しながら、
ばんばんに膨らんだクリトリスに
おそろおそろシャワーを近づけていく。
次の瞬間、

ふあああ!! あっあっ!
だ、だめっ!! これ、
強すぎ……
イツツ——
ツ!

ぐちゃぐちゃ……
ぐわ……

もう一歩というところまで
昂ぶっていた性感は、
強力な水流が陰核を直撃する強烈な刺激で
一気に限界を超えてオーバーシユートする。

頭の中でバチバチと火花が弾け、
意識が真っ白に塗りつぶされる。

自分で体を支えることもできず、
壁に体を押し付けたまま、ずるずると床に崩れ落ちた。

ガチャ

ガコンツと、手から滑り落ちたシャワーヘッドが
床に当たり、大きな音を出す。

はーっ……はーっ……

シャワールームに、私の荒い息遣いと、
シャワーから流れ出る水の音だけが響いている。
その時だった。鍵をしめたはずの
部屋のドアがガチャッと開き、
誰かが室内に入ってくる。

ええっ！だ、だれ……？
そ、それよりも、
まずは「ごまかなきゃ……」

幸い、脱衣スペースとシャワールームはカーテンで仕切られている。

向こうからはまだ私の様子はわからないはずだ。慌てて、床に落ちたシャワーヘッドを拾い上げ、脱力した手足に力をこめて、ゆっくりと、できるだけ自然に立ち上がる。

ミュ、なにか大きな音がしたけど、大丈夫？

な、なんだ。先生かあ……シャワーヘッドが落ちた音をきいて見に来たのかな……？

だ、大丈夫です！えと、あの……石鹸で手が滑って……シャワーヘッドが床に落ちちゃって……その……

ばくばくとうるさいほど鼓動を打つ心臓を抑えながら、慌てているのを悟られないように、できるだけなんでもなさそうな口調で返事を返す。

クチャリ

カーテンの向こうで、小さく、
ドアの鍵がしまる音が聞こえる。

えっ……先生、
なんで鍵をしめて……？

そうだったんだ。
僕は、てっきり、ミュが気分が悪くなって
倒れちゃったのかと思って、
見に来たんだよ

しゅわ しゅわ

あ……そ、そうだったんですね。
あっ……あのっ……

私は大丈夫です……
なんともないですから……

そう返答するも、カーテンの
向こうにいる先生が立ち去る様子はない。
それどころか、次はシュルシュルと
服を脱ぐ衣擦れの音が聞こえてきた。

えっっ……えっっ……
なんで、先生が服を脱いで?!

本当にそうかな?
なんだか、声も震えているよ?
おかしいなあ?

先生の返答の間も、カーテンの向こうからは
カチャカチャとベルトを外し、ズボンを
脱ぐ音が聞こえてくる。

突然の先生の理解のできない行動に、
頭の中は疑問符で埋め尽くされる。
パニックに陥る寸前で、必死に制止の声をあげる。

あっ!あのっ!!……
本当に大丈夫ですから!
でっ、出て行ってください!!

衣擦れの音が止まる。
ほっとしたのもつかの間、

心配して見に来た先生を
追い出そうだななんて、
僕は悲しいなあ。

そんなに僕を追い返そうとするなんて、
何か、後ろめたいことでも
してたんじゃないか?例えば……

ひたひたと裸足の足音が
シャワールームに近づいてくる。
カーテンに先生のシルエツトが浮かび上がる。

フツ……

パニックと恐怖に思わず
悲鳴すらあげられずに立ちすくむ私の前で、
シャワーカーテンがゆっくりと開かれる。

キウオトスの平和のために
活動してる神聖な
シャワーレのシャワー室で、

オナニーに
耽っていた、とか、ね



いやらしい笑みを浮かべ、
汚らしい陰茎を反り返るほどに
隆起させた全裸の先生が、手に持ったタブレットを
持ち上げ、画面を私に突きつける。

そこには、青い顔で立ちすくむ
全裸の私の全身が、
「リアルタイムに」映し出されていた。

い、いままでの全部、
動画で先生に見られて……?!

羞恥で一気に顔が紅潮する。
今更ながら、少しでも先生の視線を避けようと、
胸と股間を手で隠し、うずくまった。

ちて、ミュ。

これから先生が質問をするから、
よく考えて返事をするんだ。いいね？
もし、ミュが間違った返答をしてしまうと、
手違いでこの動画がキウオトスの裏ネットに
流れてしまうかもしれない。

そうになると、ミュは街を歩くだけで、
「あの子、あのオナニー動画の……」「って目で
みんなに見られる」ことになる。

もちろん、ミュウがそこまでして他人の目に止まりたいというなら、わざと間違えてもらっても構わない。

ただ、そんなことをしたミュウと、RABBIT小隊のみんなはこれまでどおりいっしょにいてくれるかな？

ニヤニヤと、いやらしい笑みを浮かべながら、勝ち誇った声で先生は続ける。

ところで、ミュウ。

僕は先生だから、ミュウがこんなことをしてしまったのにはちゃんと理由があると思うんだ。

まず、ミュウは僕のが大好きで、でも、先生と生徒だから、それを言い出せなかったんだね。

な、なにを
いって……

先生の話はちゃんと最後までできんだ！……
それで、今日は大好きな僕といっしょにいたもんだから、

一人になった途端につい我慢ができなくて一人エッチを始めてしまった

……

大好きな僕にはれるんじゃないかという不安が
いい感じのアクセントになって、
ミュは僕に犯される妄想をしながら、
盛大にイッてしまった

信じていた人の口から、
汚らわしい妄想が垂れ流される。
その言葉にはひとつの真実もなく、
理解したくもなかった。

だが、その意図だけははっきりとわかる。
この男は、自分にとって都合のいい妄想を
私に認めさせ、これから私の身に起「る」ことを、
「私が望んでやった」とにしたいんだ……。

「ああ、ミュ。質問するよ。
「ミュは僕のこと大好きだ」、
そうだね？」

……はい

なんかいやいや答えてない？
ちゃんと口に出していつてみて？

……わ、わたしは、先生のことが、
だ、だいすき……です……

やっぱりなあ！いやあ、
ミュに告白されるなんて
うれしいなあ！

……ッ

思ってもいないことを
無理やり口にさせられる
悔しさで嫌悪感に、涙がにじむ。

じゃあ、ミュは
「僕とのラブラブなセックスを
想像して、ついつい我慢できずに、
こんなところで一人エッチに
耽ってしまった」、そういうことだね？

はい、いいえじゃなくて、
きちんと言葉通りに僕に
説明してもらえる？

……ッ！……はい。
わたしは……先生との……
エッチを……ッ。そ、想像しながら……
じ、自分で……あ、あの……
慰めて、いました……

ミュは先生が思っていたよりずっと
エッチな子だったんだね！
先生、ショックだなあ。でも、
僕は先生だから、生徒のそういう悩みも
受け入れていかないといけないよね！

自分で私にそう言わせたくせに
わざとらしく驚いてみせる
不愉快さにムカムカする。

うんうん、そこまで僕の「こと」を
思ってくれているなら僕も喜んで
ミュとお付き合いしようじゃないか。
よかったねえ、ミュ。

もうこんなところでオナニーしちゃだめだぞ？
「誰が見てるか、わからないからね」

……はい

じゃあ、最後の質問だ。
大好きな先生と付き合えることになったけど、

ミュは口先だけの約束じゃ信じられないよな？
つまり、ミュは「いますぐミュとセックスして、
いっぱい愛して気持ちよくして、
ちゃんと僕がミュの「こと」を愛している「こと」を
証明してほしい」という「こと」だね？

……わ、わたしは……

その言葉を口にしなければ居場所が、
生活が奪われる。

それがわかっていても、なお、口が、動かない。
感情がそれを口にすることを拒絶する。
悔しくて、悲しくて、ぼろぼろと涙が溢れる。

あれあれ〜？もしかして、
ミユはほんとはそんなこと思って
いないのかなあ？先生、残念だよ。

悲しいけど、そんなにミユが
世間の噂になりたいなら、
それを叶えてあげるのも先生の努めかな。

じゃあこの「SOTのエッチな
うさぎさん小隊の特殊作戦♥
シャワーのシャワー室で
オナニーしてみた♥」の動画ファイルを
圧縮して…

男はおおげさに肩をすくめると、
手に持ったタブレットを私に
見えるように操作し始める。
動画圧縮中のプログレスバーが
ぐんぐんと完了に向かって伸びていく。

まつ、まつて……
いいいます！
言いますから！
待ってくださいっ！
お願いします！

ええー？でもさっき
すごい嫌そうだったしなあ。
無理してるんでしょ？
思ってもないことを口にされても、
僕もうれしくないし、いいよ。
そこで動画が上がるのみでなよ

さきほどまでとは一転して、
私に興味を失ったかのように
一瞥もくれず、タブレットの操作を
続ける男に、私の焦りは爆発し、
嫌悪感を乗り越える。

……あ、あの、先生。
こっ、こっちをみてください……。
ほ、ほ、ほら。先生に、あ、あの、愛して……
ほしくて、こ、こんなになってるんです……

わ、私のこと、いつ……いつばい愛して、
せ、先生が私のこと、ほんとにす、
すきだって……証明、してください……

少しでも男の気を引こうと、
膝をたてて足を開き、股間を
男の視線に晒す。引きつったような
笑みを浮かべ、涙を流しながら、
男にセックスを懇願する。



男はピタリと手をとめると、私に向かって振り向いた。その顔には、ニタリと、今まででもっとも邪悪な笑みが浮かんでいる。

そおか、そおか。僕も男だ。そこまで言われたらミュウが僕の愛をわかってくれるまで、存分に愛し合おうじゃないか。

男は棚にタブレットおくと、下卑た笑みを浮かべながら、私に近づいてきた。

男は私の手を掴んで立たせると、私の顔を両手でつかみ、強引に唇を奪った。

んんっ……!!うっ……
んぐっ……

ふうふうと獣のような生ぬるい男の鼻息が頬にあたって反射的に突き飛ばしたくなるのを必死にこらえる。きつく閉じた唇を、男のぬめった舌が無理やりこじあげ、私の口の中に侵入してくる。好き勝手に私の口内を舐め回すと、臭い唾液を送り込んできた。息苦しくなり、反射的にそれを飲み下してしまう。

……ぷはあ！やっぱり好きな子とする
キスは最高だなあ！なあ、ミユ？
実は先生も、ミユのことずっと狙ってたんだよ。
その薄い胸も、気弱そうな表情も、
全部僕の性癖にぶっハマってるんだ！

狙撃の訓練に付き合ったときも、
伏せてるミユを後ろから撮った写真で
何回抜いたかわからないよ！

男は鼻息を荒くしながら、
私の股間に手をつっこんできた。

あっ……！！
んんっ……！！

極度の緊張で意識が回らなかっただけで、
一度の絶頂では、まだ体は敏感なままだった。
こんな男に触られているにもかかわらず、
そこは甘い疼きを訴え、
無意識に腰がふるりと震える。

おいおい、SRTの授業には
オナニーの授業でもあるのか？
ちよっと触っただけで、
膣口から愛液がたらたらヨダレ垂らしてるぞ。
スケベすぎるだろ。

そ、そんな……、
これは、違う……
違うんです……

これだけ濡れてりゃ
前戯はいらさないな。

早速先生の本気の腰振りで、
ミユをいっぱいイカせてやるからな！

男は私の後ろに
回ると、

よっしよっしよっしよっし……



掛け声とともに私の足を掴んで抱え上げ、股間の巨根を見せつけるように鏡の前に立った。突然の展開に頭がついていかない。鏡にうつるソレは、あまりにも巨大でグロテスクで、私のおしりをぐいぐいと押し上げている。

両足をがっちり抱え上げられ抵抗することもできず、私の股間は隠すものもなく鏡に映し出される。恐怖で体が小刻みにふるぶると震える。少しでも、あの剛直が体に侵入してくるのを引き延ばそうと、必死に頭を回転させる。

あ……あの、先生。
せ、せめて、ゴム、を……

あ？なにいつてるんだ、ミュ。
恋人同士のラブラブセックスだぞ？
生にきまってるだろう？

え……でも……
私まだ、学生、で。
に、妊娠はこ、困りますっ……!!

あー、はいはい。
わかったわかった。
でも、ゴムなんてしちゃうあ僕の本気の愛が
伝わらないからなあ。
じゃあ、間をとって、出すときは外に出すから。
それならいいだろう？

う……でも……

大丈夫だよ！
絶対外に出すから！
なっ？それとも、なんだ？
ミュは恋人の言うことが
信じられないのか？

私の足を握む男の手に
ぐっと力が加わる。

いっいたっ……！
あっ……そ、それで……
いいです……

足に痛みが走り、ぎゅっと目を閉じる。
もう、抵抗しても無駄だ。
選択の権利は男の手に握られている。
いくらSMで戦闘経験を積んでいても、
弱みを握られ、武器もない私は
男に好きなように弄ばれる、
ただの弱い女にすぎない。
目の端にたまった涙がぼろりとこぼれた。

よしよし、いい子だ……
いい子には「褒美を
あげないとな……」

男は器用に体をすらして
竿をスリットに押し当てると、
じらすようにすりすり
何度も溝を往復させる。

はうっ……
んくっ……

ズリ

ズリ

望んでもいないのに、
男の竿がクリをこすりあげて弾くたびに
勝手に私の体は感じ、
反射的に声をあげてしまう。

へへっ、もう待ちきれないのか。
いいぞ、じゃあミユが
先生のチンポを持って、
オマンコの穴に導くんのだ

命令され、唇を噛みながら、
おそるおそる男の「物」に手をのばす。
手に触れたそれはやけどしそうに熱く、硬い。
いわれるがまま、のろのろと男の亀頭を
膣口にあてがう。私の初めて……
特別に思い入れがあるわけではない。

いつか、好きな人と。
たったそれっぽっちのことすら
叶えられず、この最低な男にすべてを
奪われる。キスも。貞操も。
抵抗を諦め、凍りついた感情の中でも、
それはただ悲しいと感じられた。

いいぞ、そのまま支えてるよ……
くくっ、いよいよお待ちかねの
生本番だぞ。
先生のチンポがミュウの処女膜を
突き破る瞬間を
目に焼き付けるんだ

いつ、いやっ……
あっ……!!

ぐぐっと男が腰に力をいれて
突き上げると同時に男の手の力がゆるみ、
重力に従って私の体は
男の剛直に向かって落下する。

んんんん——っ！

急に支えがなくなったことに驚き、
目を見開く私の眼前で、
鏡の中の私の膣口を、赤く膨れ上がった
男の亀頭がぐくつと押し広げる。
抵抗は、一瞬だった。

ぶつりと細い糸が切れるようにたやすく、
私の処女膜は男の剛直に屈した。
すぶりと、赤く焼けた槍のような男の
一物が私の膣内(なか)に飲み込まれる。

——ッ！い、いたっ……！！
ううっ……！！

痛みは遅れてやってきた。
うずくような鈍痛が
じんわりと腰回りに広がる。

ざりゃっ

ははっ！やったっ！やったぞっ！！
僕がミュの初めての男だ！
くうっ……！キツイ！
ああっ、たまんねえ……！！

男は快楽を貪るように、
乱暴に腰をゆすり始める。
ズンズンと剛直が私の中に
打ち付けられるたびに、
重くしびれるような衝撃が広がる。

かはっ……
はっ……あっ……
うっ……

おらっ……おらっ……!!
あぁっ………!!!
気持ち良すぎるっ!!!
もっと深くっ………!!
おらっ……!!

パンッ

パンッ

パンッ

ドッ

ドッ



男は軽々と私を持ち上げると、力任せに股間の杭に向かって何度も何度も繰り返す私の体を叩きつける。その都度、剛直は深く深く、私の膣奥まで沈み込んでいく。

繰り返される激しい抽挿に深く息をすることすらままならない。幸いなのは、想像していたよりは痛みが強くなかったことだ。

こんな状況で、使い捨てのおもちやのように乱雑に扱われているにもかかわらず、びりびりとしびれるような快感が、ぞわぞわと背筋を這い登ってくる。

はっ……はっ……
んっ……はっ……

はあっ……はあっ……!!
ミュっ……ミュッ!!

いいぞ、おまえのマンコ、最高だっ……!!
どうだ、おまえも、大好きな先生にオマンコの奥までほじられてうれしいか、ええっ……
どうなんだ、おい、ミュっ!!

うっ……!!



まるで私が感じ始めていることを見透かしたようなタイミングで、男は私に問いかける。否定したかったが、これは私が望んで始めたという体のセックスだ。下手に刺激するよりは、男の望むようにして、早くこの地獄のような時間を終わらせよう……。

はっ……はいっ……
せ、せんせいの、ち……ちんぽ、あっ

あっ……き、気持ちいい……
気持ちいいですっ……
んんっ?!

たとえ演技であっても、私は自分が男とのセックスで感じていることを認めてしまった。

言葉には言葉が宿る。こんなことでそれを実感することになるとは思いもしなかった。言葉を発してから受けた男の一突きは、もはや否定することもできないほどの快感を生じさせた。一度それを気持ちいいと思ってしまうともう、だめだった。隆奥からじゅわじゅわと愛液が溢れ出す。



おおっ？なんか急にすべりがよくなったな？

おいおい、ミユ。

おまえの中、どンドンぬるぬるが溢れてくるぞ？

まさか、ほんとに感じているのか？
ははっ!!とんだ淫乱じゃないかっ!!

うう……っ！

男の侮蔑の言葉を、自分の体すら、
自分の意思を離れて勝手に
感じ始める悔しさを、
ただ唇をかみしめて耐えることしか
できなかった。

くっ………ミユの中、
気持ち良すぎて、
もう出そうだった………

はあっ………はあっ………

首筋にあたる生暖かい男の息が荒くなる。
それに呼応するように、男の肉棒が
私の中を出入りする間隔も、
どンドン早く、短くなっていく。

ちゅっ♡
ぱんっ♡

ぱんっ♡

ちゅっ♡
ぱんっ♡

ぱんっ♡

どっ
うっ

どっ

あつ！あつ！
んっ！んあつ！

あつ！あんっ！んあつ！……
だ、だめっ！な、中は……
だめっ！あつあつ……

くうっ……！ミユっ……！！
ミユっ……！はっ！はっ！
おおっ！精子登ってきたっ！
くうっ！いくっ！いくぞっ……！！

ズキキキ♡

ズキキキ♡

ズキキキ♡

はあ
はあ

だめだめっ！そとっ！外にっ！
外に出してくださいっ！……
お、おねがいますっ！……
せんせいっ！

ぱんっぱんっと、腰を激しく打ち付けられるたびに股間から体全体に波紋のように広がる快楽に意識の大半を支配されながら、それでも懸命に最後の理性で膣内射精(なかだし)だけはいしないでほしいと、男の良心に訴えかける。

くあっ……! ああっ、わかっているわかってるって……! うおっ! 中がしまってるっ! おおっ! であるっ! 精子であるっ!

男は、壊れた振り子のように、がくがくと私の中に剛直を突き入ると、腕に力をこめて竿がぎりぎり抜ける寸前まで私を持ち上げる。

ああっ……約束はちゃんと守ってくれるんだ……

そうして、私が、愚かにも油断した瞬間に、

おっと、手が滑った

一瞬の浮遊感の後に、ズンッ! と男の肉棒が私の膣の一番奥まで深々と突き刺さる。

おんっ!

うおおっ!!!

ビュッグッハ♡

男の雄叫びとともに、男の体が
びくりと震える。
同時に膣の奥でびゆるびゆると、
何かが弾けたように広がり、
じんわりとしたぬくもりが、
絶望とともに伝わってくる。

えっ……あっ……な、なかに……？
だ、だめっ……い、いやあっ……
やだっ！やだっ！！ぬいてっ！
ぬいてくださいっ！

うっ……！くっっ……
ミュの中が、小刻みにしまっ……

うくっ！
搾り取られるっ……！

まるで最後の一滴まで絞り出そうとするかのよう、
何度も、何度も、男の体が快感に打ち震えながら、
膣奥に精液をどぶどぶと注ぎ込む。

ニヤニヤ
るらるら
♡
ひゅん♡



外に出すって……
約束したのにつ……
うっ、うええ……うああん……

狭い膣内を満たした精液が
ぶびゆるっと小さな音を
立てて結合部から溢れ出す。

はあ……はあ……
ごめんなあ、ミュ。
ちゃんと抜こうと思ったんだけど、
えーと、そう。

汗っ！汗で手が滑っちゃって、
な？しようがないよな、
これは事故だし。

そんなわけないっ！
あの瞬間、持ち上げた手はしっかり
足を掴んでたっ……「こいつは、
最初から、約束を守る気なんて、
なかったんだっ……」



一瞬でも、こんな男に期待した自分がバカだった。
もし、本当に妊娠していたらどうしよう……。不安で、眼の前が真っ暗になる。

なあに、あとでちゃんと洗っとけば大丈夫だって！
多分な！はははっ！

なにがおかしいのか、馬鹿みたいに笑う男の誠意のかけらもない言葉を聞き流しながら、私は不安に心をかき乱されながらも、それでも、ようやくこの地獄が終わったことに、少しほっとしていた……。

そういえば「あ、ミュウ。おまえ、さっきのセックスでイッた？イッてないよな？」

……え？

はっ
はっ

いやあ、だって、このセックスは「ミュウが僕の愛情を確かめたくて」始めたセックスじゃないか。

それなのに、肝心のミュウがイケてないなんて、まるで僕の愛情が足りないみたいだよな？

ぐらぐら〜♡

えっ？……
ええっ？

困惑する私を後目に、
男は言葉を続ける。

この人、なにを
言ってるの……？

これはもう、ミユがちゃんと
イツて僕の愛情が本物だって
「理解(わか)る」まで、
何度でも繰り返さないのだよな？

イ、イキました！
ちゃんとイキましたからっ！
や、やだっ……
も、もうやめてっ……！

は
はッ

ぐんぐん……♡

私の膣内で、一度は柔らかくなった
男の肉竿にムクムクと硬さが
戻ってくるのが感じられる。

まあまあ、遠慮するなつて。
ミユと僕の仲だろ？まあ、
一度腔内に出しちゃったし、
一度も二度もかわらないから、
次も腔内でいいよな？

次はいっしょに
一発満足腔内射精同時絶頂(なかだしイキ)を
決められるようにがんばろうな！

男の言葉と共に、完全に肉棒が元の硬さを
取り戻す。男はまた、手に力を込めると、
私の体を持ち上げた。私がイクまで
終わらない悪夢が、始まる。

いいやつ！やだつ！
やだやだツ！

もう許してっ！ああっ……！

恥も外聞もなく、暴れて逃げようともがくが、
男の手はがっしりと私の足を掴んで簡単に
抵抗を抑え込む。そして、抽挿を再開した。

うわ言のように否定の言葉を繰り返すも、
ばんばんと男の腰が打ち込まれるたびに
大きな喘ぎが混じるようでは、
何の説得力もない。

膣内をかき混ぜるたびに、
きゅうきゅう先生のちんぽを
しめつけて感じている淫乱のくせに
何を言っているんだ！はあ！はあ！

ちんぽに負けた今のおまえの姿を、
RABBIT小队のみんなに
見せてやりたいよ！

やっ！やだっ！
あっ、ああっ………！
うああ………

いやっ……いやだっ……！
私の居場所………ミヤ「ちゃん
サキちゃん………モエちゃん………
ちがうっ！ちがうのっ！
こんなの私じゃないっ！

あんあん嬌声をあげること、
唯一の友人たちの侮蔑に満ちた眼差しが、
頭の中に浮かんで消えていく。ふいに、
私をゆすり上げる動きがとまり、
腰をぐりぐりとグラインドさせ、
膣を押し広げる動きにかわる。
脳髄を直撃するような強い刺激から、
むすむすとじれったいような甘いしびれに
刺激も変化する。

ぽんぽん♡♡♡
ぱんぱん♡

ハハハ♡♡♡

はあ
はあ
はあ

はっ……はっ……
あっ……うあっ……

だいたい、ミュ。
おまえ、シャワーを浴びながら、
ミヤコに文句をいってたじゃないか。
あんなことに無理やりつきあわされて、
実は不満があったんだらう？

……あ、あれは……
はうっ……ち、違くて……

だいたい、処女のくせに
こんなに乱れるって、
大方SRTの部屋で
毎日オナニーしてたんだらう？

はっ

はっ

はっ

あんなストイックな戦闘集団に、
おまえみたいな淫乱は
ふさわしくないって本当に
思わなかったのか？

あっ……ああっ……
ううっ……!!

ハロウィン♡

ハロウィン♡
ハロウィン♡

男の言葉に、何も言い返せない。
実際に私は何度も失敗して、
みんなに迷惑をかけて……
それでも居場所を失いたくなくて、
私のわがままで……
あの場所に居座って……。

なあ、ミュ。気づいてるか？
今、おまえ、無意識に自分から
腰をぐりぐりおしつけてるぞ？

先生のちんぽでさっきみたい
にズンズン奥まで
突いてくださいってな

はっとして、動きを止める。
本当に勝手に腰が動いていたのかは
わからない、わからないが……
さっき動きが変わった時に、
「じれったい」と感じてしまったのは
まぎれもない事実だ。

ミュ、あの場所は、君にはふさわしくない。
居場所をつなぎとめるために、
自分に嘘をついてムリをする必要は、
もうないんだ。

ミュと僕は、恋人同士になったんだから。
一人寂しい夜は、僕のチンポが埋めてあげる。
病めるときも、健やかなるときも。喜びのときも、
悲しみのときも。僕のチンポが、君を愛そう。

僕のものになれ、ミュ

今までどうってかわって優しい声が、耳元でささやく。
私が、信じていた、優しい先生の声。
ぐらぐらと、私を形作っている私自身が揺さぶられる。

私が唯一望む居場所、私の心の拠り所に
ぼたりとどす黒いしずくが垂れ、
少しづつ、周りを侵食していく。
半狂乱になりながら、どんなにぬぐっても、
そのシミは消えることはない。なぜなら、
私自身が、その方がいいんじゃないかと、
少しでも思ってしまったから。

.....

迷ったね、ミュウ。そうだよな、
そんなにすぐには今まで
大事にしたものを捨てられないよな？

大丈夫、先生は大人だから、
最後にはミュウが賢い選択を
してくれると信じているよ。

ゆっくり考えるといい。
落ちこぼれで、影が薄くて、弱気で、
その上すぐ男のちんぽに
屈服しちゃう年中発情期の
淫乱うさぎちゃんとなりには、
ほんとうにふさわしいのは
誰なのか、ってね。

.....
ツ

思い通りにならない体がうらめしい。
先生の、言うとおりがかもしれない。

心はこんなにも違うー！と泣き叫んでいるのに、
体はもっと強い刺激をもとめて疼いている。

さあ、休憩は終わりだ。
これから、お前をイカせてやる。

自分が、快楽に抗えない浅ましい
メスだっつてことをたっぷりと
その身に教えてやるぞ

耳元でささかかれた先生のセリフに、ぞくぞくと身を震わせると同時に、どちゅどちゅと、えぐりこむような激しい抽挿が再開される。

ふあっ！ああっ！
んあっ！

さんざん焦らされた分、私の膣内はより敏感になっており、膣壁をこすりあげられるたびに生まれる快感は、いままでと比べ物にならない。

ああんっ♡んくっ！
ふああーいやあー！

津波のように押し寄せる快楽に、私の意識はもみくちゃにされる。早くイッて楽になりたい。でも、イッてしまえば、私が快楽に抗えないただのメスだと認めることになる……。

ぐるぐると同じ思考を繰り返す間にも、どんどん私の性感は高まっていく。

ニャッ♡ニャッ♡

ニャッ♡ニャッ♡

ニャッ♡ニャッ♡

ニャッ♡ニャッ♡

鏡をみてみる、ミユ。
おまえのマンコ、すごいことになっているぞ。
ほらっ！ちんぼを入れるたびに、
お前の愛液と僕の精液がぶびゅって
下品な音たてて押し出されてくる！
エロすぎるだろ、この淫乱ウサギがっ！

先生の言う通り、ズンスンと先生のちんぼが
私のマンコに打ち込まれるたびに、
白く泡立った精液と愛液の混合物が、
音をたてて飛び散る。

クリは真っ赤に充血し、みたこともないほど
膨らんでいる。自分がそんな状態になって
いることが、頭が沸騰しそうなほど恥ずかしい。

くっ……！僕も、
そろそろ限界だっ……！
くおおおおっ！

先生の動きが、射精するための、
より早く、激しいものになる。
カマかせに私の体をゆさぶり、
ガンガンと膣奥まで容赦なく
ちんぼを突き入れる。
壊れるような猛烈な抽挿に、
私の性感も一足飛びで限界に
向かって階段を駆け上る。

あっ！あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡んっ！
あっ♡やっ！んっ♡
やらあっ♡んあっ！いきたくない♡
らめえ♡♡

あっ

あっ

あっ

あっ

ズンッ！

ズンッ！

あーっ！きたっ！きたっ！
精液！！でるっ！出るっ！
ミュの淫乱マンコに！
膣出し(なかだし)！

あっ♡あっ♡いやあ♡
やらあ♡やらあ♡イクのやらあ♡
あっ♡あっ♡

ミヤコちゃん！サキちゃん！
モエちゃん！助けてえ……！！
うああっ♡♡

くああ！ミュっ！！イケッ！イケッ！
堕ちろっ！ちんぽに負けて！
イキ狂えっ！メスになれっ！
ミュっ！うおおおっ！

涙と鼻水を垂れ流しながら、
理性が最後までしがみついて
離さなかった抛り所に、みじめに助けを乞う。
ミヤコの、サキの、モエの、
笑顔が浮かんで消えていく。
助けは、こない。

先生の手が、また私を、
ちんぽが抜ける限界まで持ち上げて……
とどめとばかりに力いっぱい叩きつけた。

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

ズンッ！

ズンッ！

ッああああー！
うっ………！

ああ……もう……
だめっ……ごめん、みんな……

すべてを飲み込むような怒涛の快楽が、
私の最後の理性を押し流す。
必死につなぎとめていた手を、
私は自ら手放した。

ああああ♥らめえ♥イクう♥
イクイク♥♥イツ……

ふあああああああああああ♥♥♥♥♥

あわん！

あわん！

あわん！

……ん。……ん。
んっ！

誰かが、私の名前を呼んでいる。体が、重い。
目を覚ましたくない。もう少し、ほんのすこしでも、
何も考えずに、このまどろみに浸っていたかった。

しびれを切らしたのか、ついにぺちぺちと頬を叩かれる。
公園生活で、低血圧で朝に弱い私をいつもこんな風に、
頬を叩いて起こしてくれたのはサキちゃんだった。

もお、サキちゃんやめてよお、
今起きるからあ……

重いまぶたをがんばって開く。
目に映る光景は、思い描いた日常ではなかった。

見慣れない部屋、
出しゃばなしのシャワー！
そして、全裸の先生。

おいおい、大丈夫か？ ミユ。
まさかイキすぎて意識まで飛ばすとは思ってもみなくて、先生ちよっと焦ったぞ。
はははっ

シャワーの、シャワールーム。私は、
壁によりかかるように足を伸ばして座っている。
ゆっくりと視線を落とす。全裸の、先生。

全裸の私。私の股間からは、
今もこぷりと精液がこぼれおち、
床のタイルに精液たまりを作っている。

ああ……目が覚めたら、
全部悪い夢で。
いつも通りの大変だけど、
楽しい日常が待っていてくれればよかったのに……
これが、こんなのが……現実なんだ……



まあ、最後は少し予想外だったが、よかったな、ミュウ。ちゃんと先生のちんぽでイケてえらいぞ。

初めてのセックスで疲れただろうから、今日はキャンプに帰ってゆっくり休め。ミュウがまだRABBIT小隊に未練があるなら、気の済むまでいっしょに過ごせばいい。

先生が、私をいたわるように優しく頬を撫でる。案外、先生が私のことを好きだというのは、唯一本当のことなのかもしれない。

そのかわり、毎日シャワーに来い。恋人だからな。廃棄弁当なんかを集めて回る無駄な時間を有意義に使おうじゃないか。

なに、しっかり人数分の弁当は用意してやる。なんなら全部唐揚げ弁当にしてやってもいいぞ。みんなも喜ぶだろう。はっはっはっ！

……たとえ、私の体だけが、目的なのとしても。



体が、重い。頭も、鉛をつめられたように重く、何を言われてももはや感情は動かなかった。言うことをきかない手足を無理やり動かして、無言で立ち上がるうとする、先生が私の手を掴んだ。

ああ、ミュ。帰るのはもう少し待て。最後にやってもらうことがある。

私のそばにしゃがんでいた先生が立ち上がると、ゆるく勃起したままで、未だ硬さの残る、精液まみれのちんぽに私の手を導いた。

ミュは知らないだろうが、食事の前にいただきます、食べ終わったらごちそうさまをするように、セックスにも礼儀ってものがある。

僕の恋人のミュがそんな礼儀知らずじゃ困るからね。セックスが終わったら、ミュをいっぱい、気持ちよくしてくれたちんぽに、感謝をこめてミュの口と舌で、お掃除をするんだ。

みんなやってる一般的な礼儀だよ。疲れてるだろうけど、そこまで含めてセックスだからね。

さあ、やってみて

………はい、先生

ずっと昔、私達4人が配属されて、RABBIT小队を結成した時、ミヤコちゃんが言っていたことを、ふと思い出した。「うなぎはうなぎでも、私たちは、あのアーサー王を一度は退けた、白い獣です。権威に屈することなく、私達の守るべき正義のために、力をあわせていきましよう」

あの時のミヤコちゃんは眩しくて、あんな人と同じ隊に所属できたことが、心の底からうれしかった。

少し怒りんぼだけど、意外と面倒見のいいサキちゃんも、ちよつとかわってるけど、重火器に関しては誰も敵わないモエちゃんも。そんなみんなに囲まれて、私は、自分もなにか輝かしい存在になれるんじゃないかって勘違いしていたのかもしれない。

でも、違ったんだ。私は……私だけが、狩られる側のうなぎ、ううん、飼われるだけのうなぎ(ペット)だった。



のろのろと、言われるがまま、
私は先生のちんぽに口づける。
口の中に広がる、むわっとした生臭い精液の
匂いをかぎながら、舌でぺろぺろと
先生の亀頭をなめあげる。

おお、いいギョミト。
最高だ……

先生の恍惚とした声を聞きながら、
奉仕を続ける。枯れたと思った涙が一粒、
頬を伝い、床に消えていった。

END





























































































